**いのちについての考え**１年　立小川　優季

私は、いのちというものがどういうものか分からない。だが、いのちについて、自分なりの考えを出してみた。私の考えは３つある。

　１つ目は、いのちは幸せを運ぶものであること。愛農で５月に子牛が生まれた。その子牛が生まれるとき、みんなが応援していた。元気な子牛が生まれるとみんなが笑顔になった。私はその光景を見て、妹が生まれた時のことを思い出した。妹が生まれたのは、私が８歳の時だ。出産に立ち会い、姉になる瞬間を迎えたとき、とても幸せだったのを覚えている。妹と母に会いに来るすべての人が、笑顔でおめでとうと言って、笑っていた。これらのことから、いのちは幸せを運ぶものだと思った。

　2つ目は、いのちはとても弱いものだけど、強くなれるものだということ。私たち人間は、生きるために、多くの動物や、植物などのいのちを頂いている。私たちが、日々食べている食材、着ている服、住んでいる建物など、様々な理由で多くの動物や植物のいのちを頂いている。また住む場所や農地の開拓などの土地開発によってそこにあった動物や植物の住む環境を破壊し、多くの動物や植物のいのちを、奪っているとも思う。いのちを頂いているのは、人間だけではない。人間が食べる牛や豚などは、穀物や牧草などの植物のいのちを頂いている。そして穀物や牧草などの植物は、枯れ葉や虫、動物の死骸などの、いのちあったものが、養分に分解されたものを頂いている。この循環は、世界中で絶える間もなく行われている。今この一瞬も数えきれないほどのいのちが失われている。だから私は、いのちは簡単に頂けるものであり、弱いものだと思った。その一方でいのちを得るものは、生きるために自分をより強くしていると思う。私はいま、たくさんのいのちを頂いて生きている。寝たり起きたり、友達と笑いあったり、大好きな人とギターをしたり。いま発表できているのも、日々、いのちを頂いているからできることだと思う。もし、いのちを頂いていなかったら、病気になったり、満足に笑えなかったり、体がガリガリになったり、餓死したり。今ここで、発表することもできていなかっただろう。だから私は、いのちを頂くことは、生きるためにより自分を強くしていることだと思った。

　３つ目は、いのちはこの世の中で、1番重いものだということ。なぜそう思ったのかというと、人ひとりのいのちを、１人では生み出せないからだ。人ひとりのいのちを生み出すには男性と女性の２人の人が必要だ。なぜ、男性と女性の２人でしかいのちを作れないのか。私は、男性と女性が２人で一緒にいのちの重みを、受け止め、支えあっていくために、1人ではいのちを生み出せないのだと思う。この世の中で、いのちを生み出すということは、それほど重たいことだと思う。同性ではなく異性なのは、男性と女性、どちらの視点からも、いのちというものに、向き合っていくために、異性同士になっているのだと思う。けれど、ここでひとつ、疑問が出てしまう。シングルマザーやシングルファザーは、いのちの重みをたった１人で抱えなければならないのかということ。私の母はシングルマザーで、私と妹の２人のいのちを抱えて毎日を過ごしているのか。それは少し、違うと思った。母や私、妹も、祖父・祖母などの様々な人に支えられ、様々な人に私たちのいのちを受け止めてもらい、生きていっているのだと思う。いのちは大切なものだから、１人では抱えきれないぐらい重いものなのだと思った。また、誰かがいないといのちの在り方がわからなくなるのかなと思った。このことから、いのちはこの世で１番重たいものだと思った。

　今の私のいのちについての考えは、いのちは幸せを運んできてくれるもの。そして、弱いものだが、強くなれるもので、この世の中で１番、重たいものとなった。この考えは、また１年後や１０年後には変わっていると思う。いのちには答えがないと思うからだ。世界中の人に聞いても１人１人、違う答えが返ってくるだろう。だからこそ私は、自分が思う、いのちを大切にしていきたい。

母や妹、愛農の人々、子牛、おっとんが育ててくれているさつきなど、様々ないのちが私に幸せを注いでくれる。「いのち」というものは、私にとってかけがえのないものである。

私に将来、パートナーができて、大切にしたいいのちが増えたら、自分が思ういのちについて、改めて考えようと思う。